

## 中ノ明（なかのみよう）地区

屋敷の西側に「沼木の沼」があり、沼の中に明るく光るものがあり、拾い上げると金の仏像であったという。それが観音堂の本尊となっている。沼の中が明るくなったことから中ノ明と名付けられた。

観音寺は、草創は不明だが、真言宗自在院の末寺で、天文（一五三二〜五五）中に宥栄が再興している。本尊は、沼木沼内に沈んで、毎夜光っていた大木内にあった輝く仏像約六〇センチされている。昔は、明吉山観音寺であったが、現在は、妙吉山密蔵院といひ十七番札所となっている。三月十七日の祭礼には沼で刈り取られた稲穂を供えて供養していた。ご詠歌は

「参るより 頼みをかけし 観世音 沼木の沼に 浮かぶ水鳥」



### 中ノ明館跡

中ノ明館跡は、『新編会津風土記』に、延徳中（一四九〇年頃）大島小太郎守信によって館が築かれた。大島氏が住んでいた館跡は、町北連絡所跡である。六郎常義が先祖で、六郎とは千葉氏の一族で、千葉県佐原市付近に住んでいた国分（矢作）常義のようであり、文治年間（一一八〇）に、佐原義連に伴って、平泉を攻め、その後、会津に来たものと推定される。屋敷は、中ノ明の新村である。関東と縁のある大島氏が、関東の栃木県石橋と縁のある石橋氏と築取氏を面倒見たことで屋敷が開発される。館跡には、彼岸獅子を祀った塚がある。

### 妙吉山密蔵院（中ノ明地区）

真言宗豊山派。会津若松市相生町自在院の末寺。本尊は大日如来。檀家数二一〇戸、中の明三十戸、藤室二十七戸、達摩六戸、地区外五十七戸。境内に会津二十三観音の十七番札所の観音堂がある。

戊辰会津戦争の際、焼失し明治の初期に再建された。『新編会津風

土記』によると中ノ明村の北北東の方向に沼があり、その沼の底に沈んでいた大木の中から一尺八寸ほどの観音様が出てきたといわれている。沼木の沼は、屋敷地区の集落入口西側に、昭和三十年頃まであったが、耕地整理で消滅している。文保元年（一三二七）建立、天文元年（一五三二）宥栄という僧が再興したと伝えられる。